

平成30年度秋学期・大学院授業評価まとめ

整理番号	講義名	講義コード	履修者数	回収数	回収率	平均値	授業評価表の分析	次回講義への対応	その他
1	総合的病害虫管理学	18660003	20	8	40%	4.24	アンケート回答率は40%と、全体平均を大幅に下回った。本科目は複数の教員によるオムニバス形式で実施している。回答者の半数以上から、難易度は適切で満足できる授業内容だったという概ね良好な評価を得た。また、教員の授業の準備と熱意についても高評価であった。一方、授業に双方向性があったかについては、「どちらでもない」と「そう思わない」がそれぞれ37.5%および12.5%という評価となった。	授業の内容および進め方については本年度のレベルを維持しつつ、双方向性に留意しながら、総合的な満足度の向上に努めたい。	特になし。
2	農業生物学特論	18660004	55	37	67%	4.11	アンケートの回収率は平均を若干上回る程度であった。本科目は3名の教員によるオムニバス形式で、かつ英語による講義科目(E科目)となっている。設問の共通項目の大部分は平均ないしは平均を少し上回っており、一定以上の評価を得たと判断する。	いかにせん英語での講義とあって授業の難易度などについて考慮する必要があると判断する。また留学生にとっては教員の英語が少し分かりにくいと思われた面もあり、教員の英語による教授法について改善の必要があるかもしれない。	
3	植物生産生理学特論	18660007	5	3	60%	4.76	評価の平均点は4.76と高かった。「学生と教員とのやりとりには双方向性があった」の評価点が4.3と全体的にみると低かった。	学生と教員とのやりとりの双方向性を高めるため、質問に対してすぐに正解を説明するのではなく、正解を導くようなヒントとなる第2段、第3段の質問をし、考える時間を十分に取った授業計画を作成する。	
4	ゲノムサイエンスとエビデネティクス	18660008	20	11	55%	4.18	アンケート集計によれば、講義の総合評価は4.2であり、学生満足度的には良好な講義であったと推測できる。しかしながら、<授業の難易度は適切であったか: 3.8>、および<この授業についてより深く学びたいか: 3.9>の評価が3点代であった。おそらく、講義内容が幾分難しかったのではないかとと思われる。	学生の理解度をチェックしながら、講義を進行する配慮が次回には必要と思われる。	
5	昆虫多様性学	18660009	8	3	38%	4.72	アンケート実施を周知しなかったため、回収率が低くなったと思われる。総合評価の平均点は4.72点と高かったため、内容については概ね満足していると評価できる。	少人数であるためセミナー形式で授業を進めているが、それに対する意見はなかったため、次年度も同じ形式で授業を進めたい。また、学生全員が自主的に参加できるように工夫したい。	
6	植物疫学特論	18660010	10	5	50%	3.9	成績評価は、比較的最新の話題について論じた専門書を利用したレポート提出とした。そのため特に双方向性講義において改善すべきであると考えられる。	受講生がより取り組みやすい専門書を選定するとともに、双方向性、講義方法についても検討することによって、満足度の向上につなげていきたい。	
7	昆虫病理学特論	18660011	19	9	47%	4.17	アンケート回答率は47.4%と、全体平均を大幅に下回った。昨年度と同様に、成績評価は、講義に関連した専門書を使用してのレポート提出とした。アンケートへの回答が難しい設問もあったかと思うが、回答者からは概ね良好な評価を受けたと考える。	来年度は、双方向性を重視しながら、学生の興味・関心や理解度をより向上させるような授業内容への改善に努めたい。	特になし。
8	園芸科学特論	18660014	10	8	80%	4.69	担当講義のアンケート回収率は80%で、全体平均(60.6%)よりも高かった。(設問1)～(設問10)のすべてにおいて、平均値は4.3以上であった。学修マネジメントに該当する「双方向性」(設問4)、インストラクションに該当する「説明のわかりやすさ」(設問5)、授業者の特徴に該当する「熱意」、ならびに「総合評価」(設問10)では平均値が4.9であり、受講生にとって一定の評価を得られたと受け止めている。一方で、(設問8)に示されるように遅刻をした学生もいたことから、主体的学修への取り組みが必要だと考える。(設問8)を除けば、各項目の評価は4もしくは5であったことから、概ね受講生に満足いただける講義であったと考える。	(1)で述べたように、遅刻をする学生がいたことから、次回からは主体的学修のための動機付けの取り組みについて考えたい。総じて高評価ではあったが、さらにわかりやすい授業、満足度の高い授業ができるよう、努めていきたい。	講義最終回に授業評価アンケートに関するアナウンスを失念してしまい、受講生へのメール連絡によってアンケートへの協力依頼を行った。回収状況について案じていたが、回収率は80%であった。受講生の前向きな対応に感謝したい。あわせて回収率のさらなる向上のため、講義最終回中にアンケート回答の時間を設けるなど、回収率のさらなる向上を目指したい。
9	植物環境調節学特論	18660016	15	11	73%	4.02	受講者一人当たりの出席率は約85%で比較的良好であった。授業の内容および進め方についても、平均評点が3.4～4.8(全体の平均が4.0)であったことから、概ね良好な評価を受けたと考える。しかし、一部の学生のみだが著しく低く評価したケースが各項目で見出された。すなわち、過半の学生の関心や学修意欲を個人レベルで得ることにはある程度達成したものの、「教室の一体感」を得て集団としてのモチベーションを高く維持するための工夫もあって然るべき、と考えられる。とくに、当該授業の担当教員が学府再編によって環境農学専攻から資源生物科学専攻に移り、アドバンス科目として当該授業を受講する学生の専門性も従来の農業環境系から生物学・生命科学系にシフトしたため、彼らの学術的関心を得るための講義手法が必要であった。なお、自由記述欄には意見がなかった。	今回、評点が低かった項目に鑑み、①当該授業の主題である「植物環境調節」と学生らの専門性の接点に留意し、関連学術領域について学修意欲を高め、より深く学ぼうという意識を引き出すこと、②双方向性を意識して、教員と学生および学生相互のやりとりによって教室に全員参加のイメージを創出することが求められる。	大学院連携科目として多く(12名)の農学部4年生が参加しているが、修士課程1年生を対象としてデザインされた講義で話題とした実験手法、データの統計処理、あるいは農業に関する社会的背景に関する知識やスキルが不足している。授業の一環として課したレポートから、(修士課程1年生に比べて)学部4年生の理解度が概ね低いことが推察された。しかし、講義の学術水準を学部レベルに下げることが適切ではなく、大学院連携科目としての受講はできれば避けてほしいと考える。
10	生体制御システム学特論	18660104	5	3	60%	4.18	受講登録者5名のうち3名のみから回答を得た(60%)。平均評点は3.3から5.0であった。最も低い評点(3.3)は「教員は、毎回の授業で、学ぶべき重要な目標を明確に示した」の項目であり、最も高い評点(5.0)は「授業には遅刻することなく毎回出席した」の項目であった。専門的な分野で自主的な学習のウェイトを高くした内容であったため、具体的な目標が学生に伝わっていなかったと考えられる。	アンケートの回収率については、授業中に回答時間を設けて回収率を高める。今年度からカリキュラム変更に伴い、授業回数が少なくなったため、授業内容を深化させることが難しかった。次年度は内容の焦点を絞り、明確な学修目標の伝達や、主体的な学習および建設的な議論を行う意欲を高めるような働きかけをしていきたい。	
11	動物形態形成学特論	18660105	16	4	25%	3.89	今回の授業評価では、16名の登録者に対し4名からの回答(回収率25%)しか得られなかった。この回答数では、極端に高い、もしくは低い評価をつける回答者が一人でもいないと、集計結果(平均値)に大きく影響するため、今回は参考データとしてしか分析できないように思われる。その上で評価内容を見ると、教員の授業の準備(共-68)や熱意(共-81)については比較的高い評価がされており、授業内容についての関心を高められた(共-221)ように思われる。一方、授業の双方向性(共-60)についてはもっとも低い評価となっている。授業の難易度については回答者全員が異なる評価をしており(共-221)、予備知識の量や授業内容に対する関心の高さなどの違いにより受講学生の間で内容の理解に差があったのではないかと考えられる。	本年度は遅刻して入室する学生が多く、必ずしも全ての受講者が熱心に取り組んでいたとは言い難い。その上で、少ない授業評価の結果から判断すれば、次回講義について課題とすべきことは授業の双方向性をもう少し向上させることも知れない。それにより、受講学生の授業内容に対する関心度をより高められるようにできるように思われる。	

平成30年度秋学期・大学院授業評価まとめ

整理番号	講義名	講義コード	履修者数	回収数	回収率	平均値	授業評価表の分析	次回講義への対応	その他
12	動物生殖生理学特論	18660106	18	6	33%	4.13	アンケート回答率は33%と、全体平均を大幅に下回った。評価の平均点は4.0であった。「学生と教員とのやりとりには双方向性があった」と及び「この授業内容についてより深く学びたいか」については、評価の平均点が3.9で最も低かった。	本年度は学部生11名と院生18名を合わせて29名が受講していた。昨年度と比べて大幅に人数が増え、それに伴い当分野以外の学生の受講も増えたため「学生とのやりとり」と「深く学びたい」が低い評価であったと思われる。	
13	筋肉・食肉科学特論	18660107	16	7	44%	4.62	今回の授業評価では、16名の登録者に対し7名から回答があった(回収率44%)。この低い回収率から参考データとして以下の通り分析結果を記載する。9つの評価項目(質問項目)に対する評点(最高点は5点)の平均値は4.6であり、また総合評価点(満足度)は4.7であった。いずれの評点も科目群平均値を上回っていたことから本講義に対する評価は良好であったと判断された。相対的に評点が低い項目は「授業の難易度」と「シラバスの学習目標の明確さ」であり、それぞれ評点は4.3、4.4であった。	授業評価表の分析結果(参考データ)を受けて、次回講義でも最新の情報を加えつつ同様のスタイルで実施する予定である。相対的に評点が低い項目が「授業の難易度」と「シラバスの学習目標の明確さ」であったので、後者に関しては改善する。「授業の難易度」に関しては、易しすぎたのか、あるいは難しすぎたのかが不明であるので講義中に確認しながら進めることにしたい。元より、授業評価の回収率を上げるべく、指導することが先決である。	
14	水産資源増殖学特論	18660110	9	7	78%	3.86	9名の登録者に対し7名からの解答(回収率77.8%)を得た。平均評点は3.0-4.4で、最も低いものは主体的学修であり、最も高いものは教員の説明、学習目標であった。本授業は、自主的な学習のウエイトを高く設定した内容としており、目標は伝わっていたものの、主体的な学修には至らなかったものと考えられる。	自由記述欄に、課題の提示を早めてほしいとあったので、次回の講義では、課題の提示を早め、自主的な学習を促すための資料をこれまで以上に提示することによって対応する予定である。	
15	水圏生物資源環境学特論	18660111	20	12	60%	4.52	ほぼ全ての質問事項において、科目群の平均を上回る評価が得られている。毎年、講義内容を更新し、常に最新の学術知見を伝えることを心がけている。唯一、共-18(遅刻)が平均を下回っている。これについては、出席・遅刻等を成績評価に加味していない点が影響しているのかも知れないが、あくまでも学生の主体性に委ねたいと考えている。	講義資料として多くの写真・図表を用意したパワーポイントファイルをMoodleにアップしている。講義ではパワーポイント映写と板書を併用し、毎回の講義には、常に最新の話題を追加するようにしている。次回の講義でも現在の方法を踏襲する予定である。	板書しながら口述することから、どうしてもチョークの粉を吸ってしまう。講義終了時には喉がいがらっぽくなり講義後のうがいが欠かせない(マスク着用は声の通りが悪くなるので、使用していない)。ホワイトボードとマーカー、あるいは電子黒板の導入を希望する。
16	森林計画学特論	18661005	9	5	56%	4.24			
17	山地防災学特論	18661006	18	10	56%	4.27	単位授業となって初めての授業であり、試行錯誤の結果、授業内容が十分でなかった可能性はあるが、上記のように、現況の授業で十分と考えられる。高度な専門性を有する種々の課題に関して、講義中に受講者を指名して質問を行ったが、受講者のほぼ全員が大変良く対応しており、講義の内容と趣旨が良く伝わっていると感じた。しかし、最近では毎年新たな山地災害が生じ、森林の防災機能に関する研究の急速な進展と同時に防災機能に対する期待にも変化が生じるために、年度ごとに講義内容の変更が多く、内容の説明が十分とは言えない面もあった。この件に関しては、来年度に向けてさらに改善に取り組むたい。	予定した内容をすべて講義できなかった面もあるので、来年度に向けて、授業時間配分やレポート課題などについて検討を加えて改善に取り組むたい。	
18	造林学特論	18661008	19	6	32%	3.4	回収率および平均値共に極めて低く、個別の評価ではなく全体の講義に対する姿勢について見直す必要がある。	講義全体を見直し、シラバスも含めて再度講義の構築を行う。	
19	灌漑利水学特論	18661104	8	4	50%	4			
20	水環境解析学特論	18661105	3	1	33%	4.7			
21	土壌学特論	18661107	12	11	92%	4.61	授業アンケートの集計結果(回収率91.7%)によると、シラバスの学修目標は明確であり(4.9)、授業回ごとの目標も明確であり(4.8)、授業の難易度も適切であった(4.6)と考えられる。また、教員-学生間の双方向性も高く(4.6)、説明も分かり易く(4.8)、教員の授業に対する準備も十分であり(5.0)、教員の授業に対する熱意も十分であった(4.8)と考えられる。「遅刻することなく毎回出席したか」および「より深く学びたいか」の問いに対しては4.0および4.1とやや低い値となったが肯定的な範囲内であった。総合評価では、総合的にこの授業に対して高い満足が得られていると考えられた(4.5)。また、自由記述回答には、下記のコメントがあった。 ・質問に毎回答えて頂き、疑問をすぐに解決できた。 ・参加者の習熟度を鑑みた授業設定をして下さり、非常に有意義であった。土壌の形成や分類方法に関して、新しい知識を得ることが出来ました。	概ね、高い評価が得られていることから、次回の講義でも今回の授業のスタイルを継続する。	特になし。
22	農業気象学特論	18661108	7	3	43%	4.88	本科目は、気象環境学研究室の教員2名が同時に参加して、Climate Changeの英書を使ってセミナー形式で開講されている。いずれの項目も高い評価であるが、受講者の多くが気象環境学研究室の学生で、回答者数も少数であるので、本評価はあまり参考にならない。	Climate Changeの英書を使ってセミナー形式で進めることについて学生の評価は高かったが、もう少し農業に関連の強い英書を使用することを検討したい。	
23	生産システム設計学特論	18661110	8	3	38%	3.9			
24	ポストハーベスト工学特論	18661111	14	5	36%	4.1	ほとんどの評価項目で肯定的回答の目安となる評点4を超えており、授業の準備状況や熱意についてはより良好な結果を得た。説明の仕方について、1名が2を付けており、改善の余地はあるものと考えられるが、概ね良好であるといえる。また、資料は毎回配布していたが、冊子体での配布を希望するコメントもあったので対応していきたい。	資料がおもにパワーポイント形式であったために、説明を聞いておかないと分かりづらい部分もあったのかもしれない。文書形式の資料を作成するとともに、Moodle上に資料をアップロードし、冊子体と同じ効果があげられるよう対策を立てたい。	
25	森林バイオマス科学	18661305	13	8	62%	4.39	本科目は、サステナブル資源科学講座の構成教員によって実施され、堤祐司、久米篤、小名俊博、清水邦義の各教員による分担で実施された。Webアンケート結果は総じて全体平均よりも少しずつ高く、特に授業満足度や学習意欲の向上にかかわる項目についての評価は高かった。開講初年度ということもあり、講義内容の設定については手探りの部分もあったが、シラバスについての評価は比較的高く、各担当者による授業の運営についても大きな問題はなかった。ただし、各担当者による授業レベルに違いがあり、受講者増に伴う双方向性の低下については改善の余地があると判断された。	来年度は、各教員に授業中の受講者とのやり取りを増やすように促し、フィードバックを得ることで、講義内容のレベルのバラツキについても調整していきたい。	特になし。
26	ゲノム安定性維持機構特論	18663004	7	4	57%	3.78			

平成30年度秋学期・大学院授業評価まとめ

整理番号	講義名	講義コード	履修者数	回収数	回収率	平均値	授業評価表の分析	次回講義への対応	その他
27	海洋生命化学特論	18663005	16	15	94%	4.46	調査した項目の中では、学生と教員との間に双方向性があったかという項目の評価が平均より低かったが、それ以外はおよそ平均と同等か、平均を超えていた。総合評価は4.7であり、全体的には満足度が高かったと考えられる。	授業の双方向性に関する項目の評価が平均に比べて低かったため、この点については、次回の講義に向けて改善の余地がある。	
28	生物有機化学特論	18663006	2	2	100%	4.05	講義の出欠のほかに、質問、疑問などを提出することにより問題意識を高めるために、学生との相方向性が意識された授業の組み立て方を心掛けている。学生に問題解決能力、理解力、応用力などを身につけさせるために、毎回コメントを提出することにより学生参加型の講義を試行しているが、基本的には学生の能力の向上につながる結果が得られているように思われる。	授業中、自ら質問をする学生はあまりみられなかったが、コメントを書かせると、面白い反応を返してくれる学生が多々みられた。ただ単に記憶すれば良いのでは無く、できるだけ考えさせるような講義形式をとったが、学生は、まだあまり慣れていないらしく、自分で考えることができず内容の理解が不十分なこともあり、今後の課題となった。	
29	生物物理化学特論	18663007	8	8	100%	4.61	10の項目のうち9つの項目で科目群平均値よりも高い数字となっているので、専門的内容にも関わらず、概ね満足度の高い講義であったと考えられる。しかし、「授業の難易度は適切であったか」については、平均よりわずかに低い値となっている。このことは、大学院用に設定した授業内容が、受講学生が想定していたよりも難易度が高かったことが原因と考えられる。	授業の難易度を下げるとともに、理解度の向上のために、授業の説明方法を工夫することで改善する予定である。	
30	合成生物学特論	18663107	1	0	0%	0	他学府からの受講者が多く、本学府からの参加者が一名と少なく、アンケート回収率が低かった。	次回からは授業改善の情報としてアンケートが回収できるよう対応する。	
31	代謝機能調節学特論	18663108	2	2	100%	4.6	大学院の受講生は2名と少なかったが、全項目の平均値は4.6であり、共-60(学修マネジメント)、-67(インストラクション)、-68(インストラクション)、-81(授業者の特徴)は評価5であった。以上より受講生は本講義を好意的に評価していると判断した。講義の難易度について問うた共-211が平均値を下回る評価4であるため、改善の余地があると考えられる。	講義内容と難易度について再検討を行う。	
32	植物遺伝子工学特論	18663111	2	2	100%	4.9	主に最近の学術論文を題材にして資料を配布し、時折、対話を取り入れる形式で講義を進めた。アンケート全設問の平均は4.9と高く、4.5点であった2つの設問7(授業者の特徴)と設問9(学習意欲)以外の項目は、すべて5点であった。	4.5点の評価であった「授業者の特徴」と「学習意欲」の2点については、改善の余地はあると考えた。深く学びたいと興味をかりたてるような話題と最新の情報を講義に盛り込み、次年度以降も一層の充実を図りたい。	特になし。
33	発酵化学特論	18663115	22	7	32%	4.45	今年度からクォーター制の授業となったために、内容を大きく変更した。学生は熱心に授業に参加していたので、概ね満足度の高い内容であったと考えている。	授業中に学生に質問や感想を書かせて、次の授業でその質問等に答える形式で進めてきたが、今後は授業中にも質問をする時間を設けて、さらに双方向性のある授業としたい。またアンケートに回答する学生が少なかったため、次回は必ず提出するように授業中にアナウンスしたい。	
34	微生物工学特論	18663116	8	4	50%	3.57			
35	食品加工学特論	18663302	39	27	69%	4.62	こちらが考えている本講義の趣旨は十分に感じ取ってもらえている結果と感じている。しかし、今年度からクォーター制に変わったが、それに対する対策を十分とれないまま講義に臨んでしまった。そのため、双方向性を感じ取れる様な時間の余裕がなく、伝えるべき量が多すぎたと考えている。	まず、自由記述欄で指摘してくれているように、スライドを改良する必要があると感じている。質問時間を設定するなどにより学生の積極的な授業への参加を促すようにしたいと考える。さらに、受講者の多くが食品企業への就職を考えていると予想されるため、講義内容と食品企業における研究の関連をより積極的に説明し、予習・復習に対する意欲を向上させたい。	
36	食品機能評価システム特論	18663304	8	6	75%	4.57	受講者全員が興味を持って積極的に受講しており、課題としての資料作成量が多いにも関わらず概ね満足度高かったと思われる。	引き続き双方向性のスタイルを踏襲するとともにフリーディスカッションの時間を設けた。	
37	基礎統計学	18665030	19	15	79%	4.37			
38	農学生命科学	18665031	15	11	73%	4.59			
39	フードサイエンス・フードシステム論	18665032	17	11	65%	4.19	本講義は、教員7名によるオムニバス形式の講義である。受講学生のうち食品を学部で学んだことのある学生は数名しかおらず、基礎とは言え、大学院の講義内容であるため専門外の学生には、生化学、化学の基礎知識も乏しいので理解が難しかったと思われる。	食を専門とする学生にはほんの一部の学生には、不満が出ると思われるが、受講学生の専門性(専門外の学生が多い)を考慮してさらに講義内容の精査を行い、平易な内容で講義を行う必要があると思われる。	
40	研究基礎概論	18665033	21	17	81%	4.68			
41	機能性多糖分析学特論	18669901	27	25	93%	4.48	学生の出席は概ね良好で、無断欠席は無かった。授業の総合評価は平均をやや上回っており、授業の目標や講義内容および準備資料などについて、概ね支持が得られたものと考えられる。ただし、例年に比べて受講者数が増えたこともあり、双方向性には欠けていた。	次期も同様の講義形式による授業の継続を予定するが、質問の投げ掛けなど双方向性を引き出す工夫を盛り込みたい。また、自由回答において講義内容の偏りや理解が困難だった領域があったと判断される意見があり、学生の学習意欲と理解の向上を図るための改善を講じる。	